

元明小説中の春の行事

田 中 克 己

夏休み中の勉強はかたすぎるものは避けて、手もとにある水滸伝をはじめ元明の小説をよむのに限つた。その結果は、文学史的には大して得ることがなかつたが、中国の年中行事に關係した描写が、ところどころにあるのに気づいた。

周知のごとく広大な中国ではあるし、年代的にも永い中国の慣習をある点に限つてとらへることは大いに必要と思ふ。その意味で門外漢であるが、専門家の参考に資し得るかも知れないと以下に記すことにする。ただし文学的描写であるから年代や地域に關しては正確を期し難いが、一応事実に近いか否か検することとし、以下に利用した版本を記しておく。

- 水滸伝(平岡竜城氏訳) 大正三 東京 近世漢文学会
 京本通俗小説 一九五五(二版)上海 古典文学出版社
 初刻拍案驚奇 一九五七 同 同
 二刻拍案驚奇 一九五七 同 同
 古今小説 一九五八 北京 人民文学出版社

警世通言

一九五八

香港 中華書局

醒世恆言

一九五八

同 同

真本金瓶梅

香港

広智書局

剪燈新話・剪燈餘話・覺燈因話

一九五七

上海 古典文学出版社

話本選

一九五九

北京 人民文学出版社

除夜と新年

除夜や新年の行事は、敘上の小説類にはあまり見えてゐない。その理由については私の考があるが、ここではいはないことにして、まづまづくはしく記してゐるのは「金瓶梅」の第七八回である。この小説のヒロインのひとりである李瓶児(三)の死んだ年の除夜(二)(大晦日)、家々では爆竹をならし、春聯(三)と桃符(四)とを貼つたことが記されたあと、重和元年(五)宋の徽宗の年(六)正月元旦となると、西門慶は早く起き、冠冕をつけ、大紅を

着て、天地に對し紙錢を燒き、點心を食つてから、馬に乗つて年始まはりに出かける。

また主婦の呉月娘は、婦人どもと一緒に早く起きて来て、化粧をし、髪かざりをつけ、錦の裙子に刺繡した襖を着、襪や鞋もいいのをはき、あでやかにめかしたてる。みなが月娘の房に来てお祝をいふ。

小者の平安兒と当番の節級は門首で拜帖の受付をし、記名簿を差出し、やつて来る役人たちに応待する。

下男二人は、新しい衣裳をつけ、新しい靴と帽子とで、門口で毬を蹴り、爆竹を鳴らし、西瓜の種子をたべる。

また各家の番頭や手代たちの年賀の挨拶に来るものは、数しれないほどだが、これに對しては娘婿の陳敬濟がひとりで応待する。

正午ごろになると、西門慶が府県の役所の拜礼をおへて帰つて来る。馬を下りるやいなや、愛人林太太の子、したがつて義児格の王三官が礼服で来て、これは座敷に通される。西門慶にむかつて王三官は四雙八拜し、ついで主婦の呉月娘にも会はしてくれといふ。最も親しいものの態度である。西門慶は奥へと招じ、月娘に会はせたあと、座敷に出て、酒をもつて来させ、一盃すますと、何千戸が来る。

西門慶は陳敬濟に王三官の接待をまかせ、捲棚内の何千戸の方へいつてしまふ。王三官はひとりわたり飲むと、別れを告げ、陳敬濟に門まで送られて馬に乗つて去る。

まもなく荊都監、曹指揮、喬大戸などが引きつづきやつて

来て、西門慶は一日中の客の応待で、半分よつぱらつてしまふ。そこで暮になると人を去らせて、寢室に帰つて寝る。

周知のごとく、「金瓶梅」は時代を宋、場所を山東省の清河県にとつてゐるが、描かれた風俗は明代末期のものであるといはれる。以上の描写がそれを証明するやいなや、ちよつと検してみよう。

宋代の民俗をしるした書としては、孟元老「東京夢華録」、呉自牧「夢梁錄」、周密「武林旧事」などがあつて、開封や杭州の年中行事をくはしくしるしてゐるが、これらの書の除夜など年末の記事の中には、春聯が見えない。

永尾竜造氏「支那民俗誌」上巻の「春聯の起源」に引く陳雲瞻「簪雲樓雜說」では、春聯は明の太祖がはじめたとするが、永尾氏はこれを否定して宋初からではないかと疑つておいてゐる。それならば「金瓶梅」が徽宗の時のこととして、春聯をもち出したのは、あながちな時代錯誤とはいへないわけである。しかし後述する元宵の記述にも照らして、春聯をはじめ、この記述は、明代の地方紳士の家庭の元旦行事のあらましと考へればよいと思ふ。

除夜の記載は「醒世恆言」第三二巻の「黃秀才微靈玉馬墜」には

爆竹声中一歲除 春風送煖入屠蘇

千門万户曠曠日 総把新桃換旧符

といふ詩で表はされてゐる。桃符をかへること、爆竹を元旦まで鳴らしたてることが、明代も行はれたとともに、唐代の

屠蘇酒と追儺^(一七)の行事は明代には行はれなかつたことが知られる。この小説は時を唐の乾符年間(八七四—八七九)にとり、この詩も唐代のものやうに思はれるからである。

なほ除夜の行事としては「古今小説」第一卷の「蔣興哥重会珍珠衫」に、この夜さはがしく煖火盆の行事を催したことが記されてゐる。この小説は場所を広東にとり、時代も明代としてゐるが、場所が辺僻だけに特殊な行事であるかも知れない。許政揚氏の註には、煖火盆は焼帆盆で、除夜に家々で庭に松柏の枝をつみ重ね、火をつけて焼く。また焼松盆ともいふとある。

「金瓶梅」に見えない除夜の行事としては、「警世通言」第一五卷の「金令史美婢酬秀童」に蘇州府崑山県の令史金滿のこととして、除夜に三牲香紙をそなへ、呉庫内で城隍爺を拜したことが見られる。これも崑山県だけのことなのかどうか明らかでない。

さて元旦の行事にもどると、「金瓶梅」では官吏である主人は、早起きし、礼装したのち、天地を祭り、役所の年賀に出かけるが、崑山県の令史金滿の場合は、夜の明けきらない中に知県は衆官と牌を拜して新年を賀し、それから孔子廟に赴いて香をそなへ、役所に帰つて礼をかはしたと見える。西門慶の清河県でもほぼこれと同じ儀式が行はれたのであらうが、略されてゐる。

官吏でない平民は早朝の年賀を神仏に対して行ふ。「古今小説」第三五卷の「簡帖僧巧騙皇甫妻」では、主人公が毎年

夫妻で寺へ参詣したと記す。ただし時代を宋代とし、場所も汴京としてゐる。しかし明代もこれが行はれたことは崇禎八年(一六三五)の序のある「帝京景物略」に元旦より開く寺廟として東嶽廟、白塔寺をあげてをり、清代のこととしては「燕京歲時記」に北京の大鐘寺(覺生寺)、白雲觀、曹老公觀、火神廟をもあげてゐる。これはこの間までの北京でも引きつぎ行はれた。

二日の行事はこれまた「金瓶梅」の前掲の箇所のつづきに記して、西門慶が年始の廻礼にゆき、晩がた帰宅すると、姻戚親友があがりこんで待つてゐる。元日の堅くるしい附合ひより親しいものの年賀の日なのである。

三日は同じく西門慶の廻礼で、その訪ね先の中には妻の兄呉大舅の家があつたことは、翌四日返礼に來た呉大舅の不在をわびることばで知られる。

四日も廻礼の日で、西門慶は出かけ、帰ると玉皇廟の呉道官が來、また呉大舅が來る。

五日は午前中が役所の仕事はじめて、午後は酒宴である。

「金瓶梅」以外にはこの五日間の記載のあるのは、前掲「警世通言」第一五卷のみで、崑山県の令史金滿は元旦以後、仕事に追はれて、年節の酒を飲まないでござし、五日になると蘇州風俗、是日家家戸戸、祭献五路大神、謂之燒利市。

喫過了利市飯、方纔出門做買売。

とあつて、財神五路大神を祭つたあと、利市飯といふのを食ふとある。商人のみでなく、公吏たる金滿もこれを食つたこ

とが次に明記されてある。なほこの日の酒をも利市酒といつたことが記されてゐる。五路大神はまた路頭ともいひ、発財の神であると註されてゐる。永尾氏前掲書によれば、現在でも各地で正月五日にはこの神が祭られる由である。^(三)ただし焼利市、利市飯、利市酒の称は見えない。

「金瓶梅」では前掲の箇處のつづきに、六日に何千戸の妻が西門慶の妻呉月娘をはじめ婦人たちを招くことが記されてゐる。正月になつてはじめて女性の外出が許されるので、^(四)この日から新年の儀式がなくなることがわかる。

元宵（上元節）

上元節すなはち旧曆の正月十五日は小説の好題材である。氣候もよくなり、とりわけ新年とちがつて男女ともに夜も戸外の往来を許されるからである。また元宵を中心とする觀燈の行事が、事実上でも、中国では珍らしい恋愛の好い機会を与へたのである。

三遊亭円朝の傑作「牡丹燈籠」の種本となつた「剪燈新話」におさめる「牡丹燈記」は

方氏之據浙東也、每歲元宵、于明州張燈五夜、傾城士女、皆得縱觀。至正庚子之歲、有喬生者……但倚門佇立而已。十五夜、三更盡、游人漸稀。……

といふところからはじまり、この人間と幽靈の恋愛の場所はいまの浙江省の鄞県、時を元末の至正二〇年（一三六〇）の元宵にとつてゐる。

しかし男女の夜行の禁を特別にゆるめ、燈を盛んに燃したのは、はるか隋代にはじまる。^(一五)唐の玄宗の時が最も盛んで、宋になるとこれも豪華を好み、国を傾けた徽宗の時にまた盛んに行はれた。事実でもあつたらうし、小説家はおほむね時をここに採つてゐる。

その着想のもつとも古いのは、「大宋宣和遺事」であらう。^(一六)同書亨集には

「夜は州内では山柵とよび、内裏の前のは鰲山と呼んで、臘月しはすの一日ついでから点灯して宣和六年正月しはすの十五夜に到つた。何のために臘月しはすから点灯したか。正月十五日に雨がふれば、行楽に妨げがあると心配して、あらかじめ元宵をめでたのだ。

汴京の宮城前には五門があつたが、端門すなはち宣德門では冬至の日から鰲山といふ高灯を作つた。高さ一六丈、幅二六五歩、まんなかに二本の鰲柱をたて、高さ二四丈、金竜がこの柱にまとひつき、その口に灯が点じられ、『雙竜脚照』といつた。また中間に牌を立て、長さ三丈六尺、はば二丈四尺、金文字で八大字が書かれ『宣和練山、与民同樂』とあつた。

玄宗の時には天地水の三宮下降の日だといふので、十四日から十六日の三晩だつたのを、宋の開宝年九六八間一七五八に浙江の錢王が浙灯を二晩献じたので、十七、十八の二晩延長して五夜の元宵といふやうになつた。」

かいつまんで記すと、以上のやうに元宵の來歴を述べてゐる。唐代の張灯が隋代と同じく三夜だつたことは史実である

が、「醒世恆言」第二五卷の「独孤生婦途鬧夢」では、唐の徳宗の貞元年間（七八五—八〇四）、西川節度使だった韋臯が成都で十三日から十七日まで五夜の張灯を命じたといふ。これが事実なら、銭王の二夜を献ずるより早かつたわけである。

さて宋代汴京の元宵に關しては「東京夢華録」の元宵の條に

正月十五日元宵、大内前自歲前冬至後、開封府絞（結）縛山棚立木正對宣徳樓

とあり、また酸棗門でも十二月から点灯したとする。しかし呉越の銭王のおかげで五夜に延びたといふのは「侯鯖録」の伝へるところだが、「鉄圍山叢談」では、乾徳五年（九六七）に太祖が蜀の降服を賀して二夜を増したといひ、「搜探異聞録」では、単に国家平安を賀して増したのだといふ。

なほ「東京夢華録」では、宣徳門の字は「宣和与民同樂」の六字だったといひ、雙竜のことも

於左右門上、各以草把縛成戲竜之状、用青幕遮籠、草上密置灯燭数万盞、望之蜿蜒如雙竜飛走

といひ、だいぶ詳しいとともに、「大宋宣和遺事」がやはり小説であつて事実そのままではないことを示す。

ただし「古今小説」第二四卷の「楊思温燕山逢故人」に於て徽宗治下の汴京の元宵の光景は、「東京夢華録」の十四、十五、十六の三夜の條を摘抄してゐる。楊思温が実見したと称する燕山（いまの北京）の元宵の光景は珍しく

雖居北地、也重元宵。未聞鼓樂喧天、只聽胡笳聒耳。

家家点起、応無陸地金蓮。処処安排、那得玉梅雪柳。小番鬢刃挑大蒜、岐婆頭上帶生葱。漢兒誰負一張琴、女們尽敲三棒鼓。

といふ詞の示すごとく、すでに元宵は行はれてゐるが、汴京の婦人がこの夜、髪を飾つた玉梅、雪柳など紙や絹製のかざしが未だ行はれてゐない、といふのは或ひは真相かもしれない。

話をさかのぼらすなら、唐代の元宵は「初刻拍案驚奇」卷七の「唐明皇好道集奇人・武惠妃崇禪闍異法」に玄宗の世のこととして記されてゐて、

「開元（七一二—七四一）の初には、正月の元宵の夜に、玄宗は上陽宮で灯を觀た。尚方署の匠人の毛順心が巧みにからくりを使つて技術をこらし、色絹をつけた楼三十余間なのを造つた。楼の高さは百五十尺で、多く黄金・翡翠・真珠・玉を象嵌し、楼下に坐して楼上をながめると、楼いづばいに龍鳳鸞豹をはじめあらゆる鳥獸の灯で、ひとたび点火すると、そのいろいろの鳥獸が、まはるものは廻り、跳ねるものはね、舞ふものは舞つて」

としるしてゐる。この記載は永尾氏の示す「明皇雜録」の記載とほぼ等しいが、実は「太平広記」卷三〇そのままであるといふ。

なほつづけて玄宗が道士葉法善を召し、これにつれられて長安よりなほ盛んだといふ西涼府（武威、今甘肅省）へ空中を飛ぶのも「太平広記」卷二六葉法善に據つてゐる由である。また

元の費著の「歳華綺麗譜」は成都の行事を記した書で、文学書ではないが、玄宗はこの夜、葉法善に成都へつれ去られたことになつてゐる。^(二三)

明代も元宵は年中行事のうち、もつとも盛んなものであつた。前に引いた「五雜俎」は著者の郷里福建が最盛で十夜に及んだ、といふが、これは明末である。「剪燈新話」の「牡丹燈記」は元末のこととしてゐるが、明初もひきつづき元宵の盛んだつたことは、舞台を宋代にとりながら、明初の風俗を写す「水滸伝」が珍しく元宵を二個所に記してゐることから知られる。

その一は第三二回の「宋江夜見小鰲山・花榮大鬧清風寨」で、宋江が山東省青州の清風寨で、元宵に遭ふ箇所である。

「這の清風寨鎮上の居民、相談して灯籠をつくる事をし、準備して元宵を祝ひ、また錢や物など出しあはせ土地大王廟の前において小鰲山という灯籠をつくりたて、上面に色絹などにていろいろ花をつくり灯籠をかざりたて、五六百のともしびをともし、土地大王廟内にて種々面白いにわかなどを催し、家々の門前に灯籠棚をしつらへ、ともしびをともしそなへ、市鎮上、諸商売人諸芸人すべてあり、京師にはむろん及ばぬが、これまた人間の天上界のごとし」^(二四)

宋江は見物に行つて、灯籠に描かれた牡丹や蓮の絵を見らる。また舞鮑老的、すなはちを、どけをする一寸法師がゐる。背の低い宋江はその前に群れた人山で、いつかう見られなかつたとしるしてゐる。唐宋では元宵に雜伎が演ぜられたが、^(二五)

明代この田舎の鎮にもまだその名残りが見られたことが知られる。

「水滸伝」のいま一個所は第六五回、「時遷火燒翠雲樓・吳用智取大名府」^(三五)で、場所は大名府(いま河北省大名県)となつてゐる。当時の繁華な市街である。梁山泊の勢いよいよ揚り、城中の諸官は毎年の張灯を機会に禍を惹きおこさないかと、実行の可否を會議したあと、嘲笑されるのを恥ぢて、毎年より多く灯籠を作ることとなる。かくて二座の鰲山を市の中心に作り、十三日から十七日まで五夜の間、灯をともし。家々でも門前に灯棚をたて、仕掛火花もつくり、家なかには山棚をつり、五色の屏風を立て、そのまはりには名人の書画や骨董をならべること、わが祇園祭のごとくする。

また州橋ぎはに作つた鰲山には、上に紅竜と黄竜をしかけその鱗一枚ごとに灯を一つづつともし、口から水を吐いて州橋の下の河に流し、まはりにつけた灯は無数である。銅仏寺の前の鰲山は上に青竜をわだかまらせ、周圍に幾百の花灯をつける。翠雲樓の前の鰲山には白竜をのせて無数の灯をつける。なかでも梁山泊から変装してしのびこんだ多くの者の中、時遷が鬪賊児を売るふりをしてゐたといふのがおもしろい。鬪賊児は前に見えた玉梅雪柳と同じく、かんざしのたぐひである。

明代も末かく作られた「金瓶梅」も元宵を場景にたびたび用ゐてゐる。灯籠のことを詳しく記したのが第一五回で、山東省東平府清河県のこの夜の数十座より成る絵灯籠には

「山石は穿たれて双竜水に戯れ、
雲霞は映じて独鶴天に朝う。

金蓮灯・玉楼灯は一片の珠璣を見し、

荷花灯・芙蓉灯は千匝の錦繡を散らす。

繡球灯は皎々潔々、

雪花灯は払々扮々。

秀才灯は揖讓進止、孔孟の遺風を存し、

媳婦灯は容徳溫柔、孟姜の節操に効う。

和尚灯は月明と柳翠と相連り、

通判灯は鍾釐と小妹と並んで坐す。

師婆灯は羽扇を揮つて仮りに邪神を降し、

劉海灯は金蟾を背にして戯れに至宝を呑む。

駱駝灯・青獅灯は無価の奇珍を馱して咆々哮々、

猿猴灯・白象灯は連城の秘宝を進めて頑々要々。

七手八脚の螃蟹灯は倒に清波に戯れ、

巨口大髯の鮎魚灯は平らかに緑藻を呑む。」

といふ詞で、鳥獸魚介のほか灯籠には故事人物をも描いてあつたことがよくわかる。

またこの詞の

村裏の社鼓は隊隊として嘩闘し、
百戲の貨郎は荘荘として巧を闘わす。

といふ箇所や

また彼方には高坡に立てる打談的、楊恭をうたうあり、
此方には響鉞を擲く遊脚僧、三蔵をかたるを看る。

といふ箇所は明末も雜伎の行はれたことを示し、

琉璃の瓶は美女奇花を映じ、

雲母の障は瀛洲閩苑を並ぶ。

東のかたを見やれば雕漆牀螺鈿牀ありて金碧輝を交じえ

西のかたを望めば羊皮灯掠彩灯ありて錦繡目を奪う。

北の一帶はすべてこれ古董玩器、

南の壁廂はことごとくみな書画瓶罏。

といふ六行は家の宝物を展示したことを証し、

銀蛾は彩を闘い、

雪柳は輝を争う。

といふ箇所と

剪春蛾は鬢辺に斜に挿されて東風を鬧し、

縵涼釵は頭上に金を飛ばして光日に輝く。

の箇所はまた元宵の婦人の髪飾りを示してゐる。

なほ同詞の

元宵を売る者は高く果餠を堆み、

梅花を粘りつくる者は斉しく枯枝に挿す。

の一聯は元宵と呼ばれる一種の団子(ニヒ)の名を見せてゐるが、この小説の時代に採つた宋代にはこの称の団子はなかつたので

おのづからに時代錯誤を証明する。後の一行の「梅花」は浅

学なる私には不可解であるが、前述した玉梅とよばれる髪飾

りのことだらうか。識者の教示をまつ。

走百病が明末では十六日に行はれたことも「金瓶梅」に示

されてゐる。その第二四回に潘金蓮・孟玉楼・宋蕙蓮の三人

がこの夜、西門慶の不在中に陳敬濟と外出する。女たちがみな白い上着を着てゐるのはこの行事のせい、獅子街まで行くときかへすが、賁四の家に寄ると外に観音・閔帝の像を祭り、入口に雪花灯を吊してゐるのは、元宵のせい、この行事とは関係ない。

観音会

明代では旧暦二月十九日は観音の生辰と考へられ、寺院への参詣が行はれた。「二刻拍案驚奇」卷一には、明の嘉靖四三年（一五六四）のこととして、太湖（江蘇省）中の洞庭山の寺へ舟に乗つて参拝する人々を描く。

「初刻拍案驚奇」はこの行事を三箇所^(一)に写し出す。著者たる凌蒙初のくせであらうが、同時に観音会が明代に至つて盛んとなつた証拠とすべきであらう。同じく江南に都した南宋の歳時記には二月十九日の観音会の記載がないからである。「初刻拍案驚奇」の観音会のことを記す第一は、その巻六で、婺州（浙江省金華県）の観音信者なる女性の家に往来する尼の言として

二月十九日観音菩薩生辰、街上迎会、看的人、人山人海とし、観音像がこの日には寺より出御することをいふ。

その第二は巻八で、明の景泰年間（一四五〇—一四五六）蘇州府吳江県（江蘇）の人民で、南海普陀洛伽山の観音を信じる男が二月十九日観音の生日に、海船にのつて舟山列島中の普陀山まで焚香頂礼にゆくことを記す。

その第三は巻二四で、浙江省塩官（いま海寧県）の富豪仇氏夫妻が毎年二月十九日は観音大士の生辰とて、子供のきるやう西湖の南の天竺へ拝みにゆくことをしるす。

かやうに四例とも時代は明代、場所も江蘇浙江の一部に限られてゐるし、かはつた行事もないやうだが、このあひだまで北京でも正陽門下の観音廟で旧暦二月十九日には読経祭典を行つたので、ここに掲げておく。

寒食と清明

冬至から一百五日めが清明節で、したがつて日は定まらない。その前日が寒食である。この日はともかく、清明節は墳墓清掃その他の行事で、婦女の外出が行はれるので、小説のよきテーマとなることは上元節以上である。枚挙にいとまなといひたいが、選んでみよう。

寒食や清明節は起源も古いのに、小説ではせいぜい唐代のそれを採るのみである。しかも「古今小説」第九巻「裴晋公義還原配」が唐も終りに近い憲宗（在位八〇六）の治世のこととして、晋州万泉県（山西省蒲州）の黄小娥が、清明の日、一家総出で墓を掃ひにいつたあと、家にゐる県令にさらはれ晋国公裴度に献じられたといひ、一箇所「醒世恆言」第三五巻「独孤生帰途鬧夢」も徳宗（在位七八〇）の世のこととして、夫と生き別れの妻白氏が清明の日に、姑姉妹みな踏宵に外出したあと仮睡して夫を夢みるといふのみである。

これは全く唐代の清明の日に、寒食に断えた竈の火を新し

く燃やすと同時に打毬し、蹴鞠し、鬪雞し、卵をくらべ、杏の入った粥を食べなどすることを、墓詣りや鞦韆の遊びのほかに行つたことを、忘れたつた作者たちの手に成つた小説だからであらう。

唐について興つた後梁(九〇七)を時代にとつた「古今小説」第六卷「葛令公生遺弄珠兒」の清明節も同じく踏青と酒宴とを敘するのみである。

宋になると、寒食・清明の日の行事は「東京夢華録」などには詳しく録されてゐるが、神宗(在位一〇六八)の時の詩人柳永を主人公とする「古今小説」第一二卷の「衆名姫春風弔柳七」では、その墳に紙銭を供へ拜掃することのみ。「警世通言」第一六卷「小夫人金銭贈年少」は同じく北宋の都汴京のこととして、その清明節を詠ずる

清明何處不生煙、 郊外微風掛紙錢。

人笑人歌芳草地、 乍晴乍雨杏花天。(下略)

との詩を掲げ、これまた掛銭、踏青を写すのみである。

「古今小説」第二二卷の「木綿菴鄭虎臣報冤」に見える南宋の度宗の時の宰相賈似道の詩は、ちよつと趣を異にして

寒食家家插柳枝、 留春春亦不多時。

人生有酒須當醉、 青塚兒孫幾箇悲。

と寒食を詠じ、この日に家々では柳の枝を挿すことをいふ。

これは「武林旧事」に「清明前三日を寒食節となし、都城の人家は、みな柳を挿み簷に満つ。小坊幽曲といへども、また青々として愛すべし」といふのに合ふ。この行事はまた清代

の北京の兒童が頭に柳を戴いたのと關係がある筈である。

時代を元にとつたものには「初刻拍案驚奇」卷九の「宣徽院仕女鞦韆会・清安寺夫婦笑啼縁」があるが、これはその題に示すごとく元の大徳年間(一二九七)に時代を採り、色目人すなはち中央アジア出身の家庭の婦女が、園中で鞦韆を用ゐたことを記すが、二月の末から清明節の終るまでだつたといふ点でも有益である。

ブランコはその漢語が示すところでは外国より伝来したのもと思はれるが、唐代に盛んに行はれたのにも拘らず、宋代には廃れたと見えて、「東京夢華録」には三月一日金明池で水殿の宴に、皇帝が船にしつらへた水鞦韆を観るの記事があるのみである。しかしこの遊びが遼・金・元など外族の中国占有によつて再び輸入されたことは、この色目人官吏の家の記事でも証せられると思ふ。ただし前掲「警世通言」第一六卷の詩の最後の二行は

紅粉佳人爭画板、 練絲搖成学飛仙。

といふのであつて、明らかに鞦韆のことを詠じてゐるのであるから、この小説が真実に宋代のままを写してゐるなら、宋代にも鞦韆の戲のあつた証拠となし得る。しかしおそらく明人が類推して誤つたのだと思ふ。

とまれブランコ遊びが明代に復活したことは、「警世通言」のも一つの小説(第三四卷王嬌鸞百年長恨)でも証せられる。河南南陽衛の軍人王忠の女嬌鸞が、清明節に伯母曹姨、侍女明霞と後園で鞦韆要子をする箇所がそれである。

「金瓶梅」では第二五回に、清明節とて西門慶の不在の間に、主婦呉月娘がこれよりさき花園にこさへさした轆轤をこぐ。まづ月娘が孟玉楼と乗り、次には李瓶児と潘金蓮が乗るといふ風に、女同士三人づつ乗るのである。娘婿の陳敬濟がやつて来てうしろから押すことも記されてゐる。

「五雜俎」には、唐代の拔河（綱ひき）などがすたれ、いまは轆轤だけがのこつてゐるが、北方で盛んで南方ではあまり行はないといふ。清代では北方でも行はれなくなつたことは、「燕京歲時記」の伝へるところである。

さて清明節の最も大切な行事である墓参りは、「金瓶梅」第八九回の呉月娘が亡夫西門慶の新墳に詣る箇處にくはしい。訳してみると、かうである。

「三月の清明の佳節に、呉月娘は香や蠟燭、紙銭、肉の供物などを用意し、食物いれの大箱二個をかかせて、城外の墓地へ、西門慶の新墓の掃除にゆくこととした。孫雪娥と大姐とこしもたちを留守番にのこし、孟玉楼と小玉をつれ、それに乳母の如意児が孝哥児を抱いて、みんな轎子にのつて墓地へ行く。また呉大舅と大姉子にもいつしよに行つてくれるやう頼んだ。城内を出ると、見わたすかぎりその郊外の野原はひろがり、いいにはひがして、花紅に柳は緑、男女の遊ぶものがひつきりなし。一年四季では、春の日が最も景がよく、日は麗日、風は和風といふ。柳の眼を吹き、花の心をほころばせ、香る塵を吹き起す。空は暖かではば温和、空が寒ければ料峭といふのだが。乗つてゐる馬は、いはば宝馬、坐つ

てゐる轎はいはば香車、ゆく路はいはば芳徑、地を飛ぶ塵はいはば香塵、千花はなひらき、万草芽を生ずるをいはば春信。光は明媚、景は融和、桃は化粧して紅い顔あでやかに、柳はなよなよと腰ほそく、うぐひすの轉りは午の夢をさまし、燕の鳴きごゑは春愁を説く。日は永く鷺鳥を照らして黄に、水は渺茫と鴨を浮べて緑。水の向ふがはは誰の屋敷か、轆轤が高くかかつて柳はかすむ。まさしく春景は、本當に好い。」傑作といはれる「金瓶梅」の文章を一部訳してみたが、こどもブランドがかかつてゐる。次に前にのべた清明何処不生烟ではじまるブランドの詩があり、ついで

「呉月娘らの轎子が五里原の墓に到着すると、玳安は食物ばこをもつて来てゐて、厨で火をおこし、厨役が片づけるのはいはぬこととする。月娘と玉楼、小玉、乳母の如意児は孝哥児を抱いて、別荘の座敷に入り、腰をおろして茶をのみ、呉大姉子がまだ見えないので待つてゐる。玳安は西門慶の墓のところへゆき、机の上に鳥獸の肉、吸物、飯など祭りの品をならべ、紙銭をならべて、これまた呉大姉子と呉大舅とが驢馬轎子が雇へなかつたので遅れた呉大姉子と呉大舅とが驢馬で着くと

「一同は茶をのみ、衣服を着かへ、みんなで西門慶の墓へ祭掃に来る。かの月娘は手に五本の香をもち、自分は一本と、玉楼に一本わたし、また一本を乳母の如意児にわたして孝哥のかはりにし、二本を呉大舅大姉子にわたす。月娘は香爐にさすと、深く礼をしていふ『兄さん、生きておいでの時

は人で死んで神ですね。今日三日の清明の佳き日に、妻の呉氏の三姐、孟三姐とあなたの満一歳のことも孝哥児がつつしんでお墓の前に来て、百枚の紙銭を焼きます。この子に百歳の長命をもたせて、あなたの墓掃除をさしてやつて下さいよ。兄さん、あなたと夫婦でしたわね。その様子といはれた話を想ひ出すと、ほんとに悲しくなりますわ。』拜礼がすむと、顔をかくして大声で泣く。玉楼がすみ出て香をそなへ、また深いお辞儀をして、月娘といつしよにしばらく大声で哭する。玉楼が香をあげたあと、乳母の如意児が孝哥児を抱いて、やはり跪いて香をあげ、叩頭する。呉大舅と大姉子がみな香を焼き、礼がおはると、玳安が紙銭を焚く。それから別荘の捲棚で食卓をならべ飯を出し酒を出す。月娘は呉大舅と大姉子に上座をゆづり、月娘と玉楼が下座につく。小玉と乳母の如意児と大姉子の家で使つてゐる婢蘭花とが横座にならんで坐り酒の酌をする。』

おなじくながながと訳出したが、焼香の順がちよつと日本とちがふからである。妻はともかく、妾のあとに嗣子が来るところがちがふ。妾といへども息子にとつては父の妻につぐ母に準ずるわけである。このあと日本なら精進直しといふ料理屋へゆくことがあるが、一行も予定では帰らぬ杏花村酒樓の小高い場所、にぎやかなところに席を用意させるため玳安らを出発させながら、潘金蓮の墓のあることはしらずに通り路の寺にあがつてゆく。清明節の展墓はこのやうにあつて明朗になるのが常例といふ。

む す び

はじめの考へでは、元明の小説によつて、隨筆や風土記のするす年中行事の欠を補ふか、少くともその正しく写実であることを確かめるつもりであつたが、いづれも失望におはつた。却つてすでに定説とはなつてゐるが、これらの作品が借りてゐる時代とは矛盾して、作者の時代を写してゐるにすぎないことを知り得た。従つて年中行事をしらべるなら、明代は地誌その他に一々当るの必要だとの信念を得た。唐宋とちがつて相当数の地誌が残されてゐるからである。春の行事のみにとどまつたが、夏秋冬に亘つてもその点では大した收穫はなかつたらうと思ふ。ただわれらの周知する唐代の行事の殆ど影をひそめてゐることはこれで証し得たと思ふ。

〔註〕

(一) 永尾竜造氏の「支那民俗誌」はその上巻(大正一一、滿洲考古学会)を正月行事のみに費し三百頁以上の大冊となつてゐる。

(二) 林太曲意延賓、如意児承顔媚主の条。前掲本六四二頁以下。

(三) 永尾氏 一二七頁参照。(四) 同 七八頁同。

(五) 同 六八頁同。(六) 同 一三九頁同。

(七) 同 一五五頁同。

(八) 婦人は年始廻りはもとより、新年は外出しない。例外として「醒世通言」第三二回黃秀才徹靈玉馬墜に薛媼が隣家へ年始

にゆくことが見えるが、妓女の鴛^{ウヰ}児だつた老女のこととして明代にも許されてゐたか、またはこの小説の時代なる唐末長安の事實であつたか明らかでない。

(九) 小野忍・千田九一氏訳「金瓶梅」(中国古典文学全集)上の解題では、この小説の初版が出た年を明末の万曆四五年(一六一七)以後とし、描かれてゐる時代もこの万曆時代と明らかに断定してゐる。

(一〇) 同書八三—四頁。

(一一) 明末福建の出なる謝肇淛の「五雜俎」巻二には、儼以廩瘦、古人最重之。沿漢至唐、宮禁中皆行之。護童振子至千余人。王建詩、「金吾除夜進離名、画袴朱衣四隊行」是也。今即民間亦無此戲、但画鍾馗、与燃爆竹耳といつて、明代には追儼のもう行はれないことをいふ。

(一二) 永尾氏前掲書四九頁には「松柏桃杏といつた様な、一般にめでたいとされて居る木の枯枝を集めて、それを焼くことを生盆^{シヨウペン}という。一家の者が皆順々にこの火を跨げて越すのである。かくする事に依つて、其の年中の悪氣をやき払ひ、そして新しいめでたい事を迎へやうといふ意味である。」と記す。これがどこの行事か記してないのが欠点である。少くとも北京あたりでは行はれなかつたことが「燕京歳事記」によつて知られる。

(一三) 二二六—八頁。「燕京歳時記」では、財神の祭は正月二日である。ただ破五すなはち五日には蘇州と同じく諸商人が商売をはじめぬ。

(一四) 永尾氏(前掲書二二九頁)によれば、破五すなはち五日から女性の外出が許されるとあるが、また六日の条(二二二頁)には「婦女子は今日から互に相往来して年礼を云ひ、新婦はけ

ふなつかしい里帰りをして、」とある。

(二五) 夜禁(夜行の禁)については桑原隲蔵博士「唐明律の比較」(支那法制史論叢)に見え、なほ元宵張灯は隋の煬帝の大業六年(六一〇)より始まつたと記してゐる。

(二六) 以下一九五四年、上海、中国古典文学出版社発行の「新刊大宋宣和遺事」本七一頁以下による。

(二七) 西曆一一一四年。金の太宗の天会二年。

(二八) 杭州に都した五代の呉越の忠懿王。宋に降つて国は亡んだ。

(二九) 「東京夢華録」の(正月)十六日の条には

市人売玉梅、夜蛾、蜂児、雪柳、菩提葉、科頭円子、拍頭焦鋸。

とあつて、最後の二種が菓子であるほかは、髪に挿す飾りで絹や紙で作られたのである。(二〇) 前掲書二六八頁。

(二一) 「初刻拍案驚奇」(古典文学出版社)に附する王古魯氏の解説による。検する暇をもたなかつた。

(二二) 永尾氏前掲書二八九頁「幻術観灯」では「幽怪録」を引いて時を開元の初でなく十八年のこととし、場所も広陵となつてゐる。(二三) 平岡氏訳本第七冊七九頁。

(二四) 唐代の元宵の雑伎は石田幹之助博士「唐代風俗史抄」(唐史叢鈔)の元宵観灯の項に、北斉の頃から正月望日に物まね雑業などが行はれたことを記されてゐるのであるが、詩や文にも雑伎とこの日とを結びつけたものを見ない。ただ隋の薛道衡の「和許給事善心戲場転韻」といふ詩が京洛重新年、復属月輪円の句ではじまり、明らかに正月十五日のことを詠じてゐるが、中ごろに竟夕魚負灯、徹夜竜衝燭の句があつて観灯のことを示

し、そのすぐあとに羌笛離頭吟、胡舞龜茲曲と音楽が奏され舞が行はれたことをしるし、ついで仮面飾金銀、盛服揺珠玉。宵深戲未闌、競為人所難。臥馭飛玉勒、立騎駟銀鞍。從橫既躍劍、揮霍復跳丸。抑揚百獸舞、盤珊五禽戲。狡狴弄斑足、巨象垂長鼻。青年踰復跳、白馬廻旋駛。と仮面をつけた人物、馬の曲乗り、劍や丸の曲取り、鳥獸の踊りなどが描かれてゐるから、唐代も千秋節（皇帝の誕生日）と同じく元宵の雜戲は行はれたと考へて宜しからう。宋代の元宵の雜伎に関しては明確な記載があつて「東京夢華錄」卷六元宵の条には、楽棚といふのを設け衙前樂人をつかはして音楽や雜戲をやらしたほか、左右軍の百戲も加はつたことを記してゐる。南宋となつても国都臨安（杭州）の元宵の雜戲のことは「夢梁錄」、「西湖老人繁勝錄」にも記し、「武林旧事」にもこの日、宣徳門の下の大露台に百芸群工が競つて奇伎を呈したと記す。

(二五) 前掲書第一四冊八五頁以下。

(二六) 小野忍・千田九一氏訳「金瓶梅」（中国古典文学全集）一三七頁。

(二七) 小野勝年氏「北京年中行事記」（岩波文庫）は前掲「燕京歲時記」の訳であるが、清代の元宵に註して「糯の粉で外を裹み、中に餡を入れた団子である。餡は棗・山楂子・胡桃其他の乾果と砂糖とを練つて作る。これを茹でて食べる。」（四〇頁）とある。明代も同じであつたらう。

(二八) 「金瓶梅」はまた第四二回より四六回まで元宵を舞台としてゐるが、謝希大らが粘梅花処へゆくことを記してゐる（三〇八―九頁）。

(二九) 永尾氏前掲書二九七頁以下参照。「帝京景物略」には八

日から十八日の間のこととして、婦女着白綾衫、隊而宵行、謂無腰腿諸疾、曰走橋。至城各門、手暗風鈿、謂男子祥、曰撲釘児。とあるが、「金瓶梅」では白い衣を着ることのみが写されてゐる。「五雜俎」には齊魯人多以正月十六日遊寺觀、謂之走百病といひ、山東省に行はれ、寺院へゆくこととしてゐる。

(三〇) 滿鉄北支事務局「北京年中行事」（昭和一四）一四頁。

(三一) 後魏の賈思勰「齊民要術」卷九禮酪の条には晋の介子推の故事をあげ、その死を悲しんで忌日為之斷火、煮醴而食之、名曰寒食、蓋清明節前一日是也と定義してゐる。

(三二) これらの行事は唐人の詩に多く見える。石田幹之助博士「長安の春」参照。

(三三) 北宋の時からこの風習のあつたことは、「東京夢華錄」卷七清明節の条に見えてゐる。

(三四) 小野氏訳註「北京年中行事記」七五頁。

(三五) 朝鮮ではコンネエと呼び端午の節句に婦人たちが遊ぶが「高麗史」卷八五刑法志によれば、端午にこれを行ふことを高宗の三三年（一二四六）に禁じ、忠肅王のときまた禁じたと見えて、起原は古い。「荆楚歲時記」の註には「もと山戎の戲なり」といふ。守屋美都雄氏「荆楚歲時記の資料的研究」（大阪

大学文学部紀要三）参照。

(三六) この詩は「金瓶梅」第八九回にも載せられてゐる。

(三七) 「帝京景物略」にはこの日の掃墓のあとを哭罷、不掃也、趨芳樹、圻園圃、列坐尽醉。有歌者、哭笑無端、哀往而樂回也といつてゐる。